

国
(問題)
語

2015年度

〈2015 H27092023〉

注 意 事 項

- 1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
- 2 問題は2～10ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
- 4 マーク解答用紙記入上の注意
 - (1) 印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。
 - (2) マーク欄にははつきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	● 良い	○ 悪い	○ 悪い
マークを消す時	○ 良い	○ 悪い	○ 悪い

5 記述解答用紙記入上の注意

- (1) 記述解答用紙の所定欄(2カ所)に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。
- (2) 所定欄以外に受験番号・氏名を書いてはならない。
- (3) 受験番号の記入にあたっては、次の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

- (4) 受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。

(例) 3 8 2 5 番

↓

万	千	百	十	一
	3	8	2	5

- 6 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- 7 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。終了の指示に従わない場合は、答案のすべてを無効とするので注意すること。
- 8 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
- 9 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

(一) 次のA・Bの文章を読んで、あとの問いに答えよ。

A

シャルル・ペローといえは「サンドリヨン」とか「青髯」とか「眠りの森の少女」というような名高い童話を残していますが、私はまったくそれらの代表作と同様に、「赤頭巾」を愛読しました。

否、むしろ、「サンドリヨン」とか「青髯」を童話の世界で愛したとすれば、私はなにか大人の寒々とした心で「赤頭巾」のむごたらしい美しさを感じ、それに打たれたようでした。

愛くるしくて、心が優しく、すべて美德ばかりで悪さというものが何もない可憐な少女が、森のお婆さんの病氣を見舞に行つて、お婆さんに化けて寝ている狼にムシヤムシヤ食べられてしまう。

私達はいきなりそこで突き放されて、何か約束が違ったような感じで戸惑いしながら、然し、思わず目を打たれて、ブツンとちよん切られた空しい余白に、非常に静かな、しかも透明な、ひとつの切ない「ふるさと」を見ないでしようか。

その余白の中にくりひろげられ、私の目に沁みる風景は、可憐な少女がただ狼にムシヤムシヤ食べられているという残酷ないやらしいような風景ですが、然し、それが私の心を打つ打ち方は、若干やりきれなくて切ないものではあるにしても、決して、不潔とか、不透明というものではありません。何か、氷を抱きしめたような、切ない悲しさ、美しさ、であります。

もう一つ、違った例を引きましょう。

これは「狂言」のひとつですが、大名が太郎冠者を供につれて寺詣でを致します。突然大名が寺の屋根の鬼瓦を見て泣きだしてしまうので、太郎冠者がその次第を訊ねますと、あの鬼瓦はいかにも自分の女房に良く似ているので、見れば見るほど悲しい、と言つて、ただ、泣くのです。

まったく、ただ、これだけの話なのです。四六判の本で五、六行しかなくて、「狂言」の中でも最も短いものの一つでしょう。これは童話ではありません。いったい狂言というものは、真面目な劇の中間にはさむ息ぬきの茶番のようなもので、観衆をワツと笑わせ、気分を新にさせればそれでいいような役割のものではありませんが、この狂言を見てワツと笑つてすませるか、どうか、尤も、こんな尻切れトンボのような狂言を實際舞台でやれるかどうかは知りませんが、決して無邪気に笑うことはできないでしょう。

この狂言にもモラル——或いはモラルに相應する笑いの意味の設定がありません。お寺詣でに来て鬼瓦を見て女房を思いだして泣きだす、という、なるほど確かに滑稽で、一応笑わざるを得ませんが、同時に、いきなり、突き放されずにもいられせん。

私は笑いながら、どうしても可笑しくなるじゃないか、といった、どうすればいいのだ……という気持になり、鬼瓦を見て泣くというこの事実が、突き放されたあとの心の全てのものを攫いとして、平凡だの当然だのというものを超躍した驚くべき厳しさで襲いかかってくることに、いわば **a** の眼を閉じるような気持になるのです。逃げるにも、逃げようがありません。それは、私達がそれに気付いたときには、どうしても組みしかれずにはいられない性質のものであります。宿命などというもののよりも、もっと重たい感じのする、のつびきならぬものであります。これも亦、やっぱり我々の「ふるさと」でしょうか。

そこで私はこう思わずにはいられぬのです。つまり、モラルがない、とか、 **b** ということ、それは文学として成り立たないように思われるけれども、我々の生きる道にはどうしてもそのようではなければならぬ崖があつて、そこでは、モラルがない、ということ自体が、モラルなのだ、と。

晩年の芥川龍之介の話ですが、時々芥川の家へやってくる農民作家——この人は自身が本当の水呑百姓の生活をしている人なのですが、あるとき原稿を持ってきました。芥川が読んでみると、ある百姓が子供をもうけましたが、貧乏で、もし育てれば、親子共倒れの状態になるばかりなので、むしろ育たないことが皆のために自分のためにも幸福であろうという考えで、生れた子供を殺して、石油缶だかに入れて埋めてしまふという話を書いてありました。

芥川は話があまり暗くて、やりきれない気持になったのですが、彼の現実の生活からは割りだしてみようのない話ですし、いったい、こんな事が本当にあるのかね、と訊ねたのです。

すると、農民作家は、ぶつきらばうに、それは俺がしたのだがね、と言ひ、芥川があまりの事にほんやりしていると、あんなは、悪いことだと思ふかね、と重ねてぶつきらばうに質問しました。

芥川はその質問に返事することができませんでした。何事にまれ言葉が用意されているような多才な彼が、返事ができなかったということ、それは晩年の彼が始めて誠実な生き方と文学との歩調を合せたことを物語るように思われます。

さて、農民作家はこの動かしがたい「事実」を残して、芥川の書齋から立去ったのですが、この客が立去ると、彼は突然突き放されたような気がしました。たった一人、置き残されてしまったような気がしたのです。彼はふと、二階へ上り、なぜともなく門の方を見たそうですが、もう、農民作家の姿は見えず、初夏の青葉がギラギラしていたばかりだという話であります。

この手記ともつかぬ原稿は芥川の死後に発見されたものです。

ここに、芥川が突き放されたものは、やっぱり、モラルを超えたものであります。子を殺す話がモラルを超えているという意味ではありません。その話には全然重点を置く必要がないのです。女の話でも、童話でも、なにを持つて来ても構わぬでしょう。とにかく一つの話があつて、芥川の想像もできないような、事実でもあり、大地に根の下りた生活でもあった。芥川は、その根の下りた生活に、突き放されたでしょう。いわば、彼自身の生活が、根が下りていないためであつたかも知れません。けれども、彼の生活に根が下りていないにしても、根の下りた生活に突き放されたという事実自体は立派に根の下りた生活で

あります。

つまり、農民作家が突き放したのではなく、突き放されたという事柄のうちに芥川のすぐれた生活があったのであります。もし、作家というものが、芥川の場合のように突き放される生活を知らなければ、「赤頭巾」だの、さっきの狂言のようなものを創りだすことはできないでしょう。

モラルがないこと、突き放すこと、私はこれを文学の否定的な態度だとは思いません。むしろ、文学の建設的なもの、モラルとか社会性というようなものは、この「ふるさと」の上に立たなければならぬものだと思うのです。

(坂口安吾「文学のふるさと」による)

B

この農民作家が現実を知っているのではない。また彼の方に現実があるでもない。安吾がいおうとしているのは、芥川が「突き放された」という事柄、そこにのみ「現実」があるということだ。したがって、子を殺す話であろうと、童話であろうと、戦争であろうと、彼にはどうでもよいので、問題はその経験の性質にはない。おそらくその農民作家の作品そのものは大したものではあるまい。芥川には、こういう悲惨な現実もあるのかねといった程度の、つまりプチブルジョア・知識人の反応があっただけだ。むしろ「俺がやったのだから」という唐突な言葉に、「赤頭巾」や「伊勢物語」の一節に似た、ひとを突き放す感覚がある。これはただ芥川にとつてのみ存し、その農民作家自身にはない。

芥川が、自分はプチブルジョア・知識人で、農民が生きている現実にはショックを受けたということなら、安吾がこの遺稿に注目するはずがない。その農民作家が、もしあなたのような書斎派の作家には何もわかっていないといったところで、とるにも足らない。安吾は、「生活」というものを、農民にあり知識人になんかというような観点からいつているのではない。「生活」という語は、もともと西欧語においてそうであるように、安吾にとつて「生」にはかならなかった。生活は個性によるものであり、元来独自なものである。一般的な生活はあり得ない。めいめいが各自の独自なそして誠実な生活をもとめることが人生の目的ではなくて、他の何物が人生の目的だろうか? (「デカダン文学論」)。同じことが「現実」についていえる。それは独自の発見である。

子供を殺す話といえ、柳田国男が「山の人生」の冒頭に記している二つの話、すなわち山中に住む飢えた一家で、親がふらふらと子供を殺してしまう話にも類似した点がある。柳田は子供のころから飢饉を見聞しており、農政学者・官僚としてもその惨状をよく知っていたはずであって、この話が彼を深く感動させたのはその種の現実を知らされたからではない。おそらくそれは、この犯罪調書を読んだに「突き放される」ような感覚を覚えたからだ。

「我々が空想で描いて見る世界よりも、隠れた現実の方が遙かに物深い。又我々をして考えしめる」と、柳田は書いている。もしこうした悲惨な現実が隠れていることを知るべきだといっているのだとすれば、彼はさらに農政の改善に徹すべきであって、民俗学という迂遠な領域に入っていくのはおかしい。また「ウソ」を從憑し、泉鏡花を讚美した柳田が、空想より現実だといはずはない。

四〇年後に柳田は回顧して次のようにいつている。

この二つの犯罪を見ると、まことに可哀想な事実であった。私は誰かに話したくて、旧友の田山花袋に話したが、そんなことは滅多にない話で、余り奇抜すぎるし、事実が深刻なので、文学とか小説とかに出来ないといつて、聞き流してしまった。田山の小説に現われた自然主義というものは、文学の歴史からみて深い関係のある主張ではあったが、右の二つの実例のような悲惨な内容の話に比べれば、まるで高の知れたものである。

(「故郷七十年」)

結局柳田のいうのはこういうことだ。空想の反対物は自然主義リアリズムではない——「現実」なのだ、と。だからこそ、そのような「現実」は物深く、またわれわれを考へしめる。彼が泉鏡花を評価しているのは、それが身辺的リアリズムをこえた想像力の豊饒さを示しているからではない。そのなかに、安吾が例にあげたような「現実」の感触を保持しているからだ。柳田は、眼前になお「事実」として存続している「今昔物語」、すなわち「遠野物語」を書くことから民俗学へ入って行った。「今昔物語」に材を借りた芥川は、それらを合理的・心理的にモディファイしただけだった。そこから消えてしまったのは、たとえば「赤頭巾」が与えるような「現実」感である。それは、芥川が大衆的生存から遊離していたからでも、そこに回歸することを拒んだからでもない。彼に欠けていたのは、「突き放される」経験にはかならなかった。

逆説的だが、「根を下す」ということは、「根」から突き放されることであり、いいかえればそのようにして「根」を感知することである。芥川に生活がないというならば、安吾にはさらに生活はなかった。安吾は、自分が下層社会を放浪し、「淪落の底」にいたからという理由で、芥川は「根を下していない」といったのではない。安吾における「淪落」なるものは、実際は作品が作り出した誇張された伝説にすぎない。しかも、そういう体験がかりにあったとしても、ただか右の農民作家のような作品しか生まない。

現実には「底」や「根」が存在するのではない。安吾の経験したのはむしろ知的な問題であって、それゆえに、晩年の芥川について、「突き放された」という事柄のうちに芥川のすぐれた生活があった」というのである。醒めた冷静な眼が「現実」を見るのではない。そんなものは何も見やしない、と安吾はいふのだ。イデオロギーを捨ててものを見よといったところで、生活をもとめようとしたところと同じことだ。ただ「突き放される」ところに、「現実」があり、何に突き放されるかは、独自の問題にすぎない。

(柄谷行人「日本文化私観」論による)

問一 Aの文章中の傍線部1「何か約束が違ったような感じ」とあるが、そのように筆者が感じた理由として、最も適當なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ シャルル・ペローのすべての作品は、いずれの登場人物も幸福で満たされる展開であるはずだから。
ロ 美德を備えた登場人物は、全く災難に見舞われることがないのが童話の世界の約束事だから。
ハ 「赤頭巾」の少女は、どんな相手でも信じてしまう愚鈍さの故に、狼にだまされてしまったから。
ニ 悪徳を微塵も備えていない、童話の中の少女が非業の最期を遂げることなどあるはずはないから。
ホ 童話の世界は、結末まで読んでみると、おおむねやりきれなくて切ないものであることが通常だから。

問二 Aの文章中の空欄 a に入る語として、最も適當なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 観念 ロ 驚嘆 ハ 心 ニ 末期 ホ 悟達

問三 Aの文章中の空欄 b に入れるべき最も適當な四字の語が、A・Bのいずれの文章中にも見える。その語を抜き出して、記述解答用紙の所定の欄に記入せよ。

問四 Aの文章中の傍線部2「モラル」とほぼ同じ意味で使用されているBの文章中の語句として最も適當なものを、次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 「独自」 ロ 「ウソ」 ハ 一般的生活 ニ 底 ホ 〈現実〉

問五 Aの文章中の傍線部3「女の話でも、童話でも、なにを持って来ても構わぬでしょう」とほぼ同内容の一文をBの文章中から抜き出し、その初めと終りの三字を記述解答用紙の所定の欄に記入せよ。

問六 Bの文章中の傍線部4「伊勢物語」の一節とあるが、その一節のあらすじを記したものとして、最も適當なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 男の子と女の子が井戸に印をつけながら背比べをしたことを成長した後回想して懐かしむ話。
ロ 男が春日の里で美しい姉妹に出逢い、恋慕の情抑えがたく、狩衣の裾に歌を書いて贈るといふ風流な話。
ハ 紀有常が零落して、妻が出家して家を離れるのに、餞別すら渡せないで、茫然と立ち尽くす話。
ニ 苦勞して誘拐した女をあばら家にかくまうて、気付かぬ中にその女を鬼に食われてしまう話。
ホ 京の五条の邸に住まう女の許に通っていた男が、見張り番に隔てられて悲嘆に暮れる話。

問七 A・Bの文章の筆者が、共通して評価している芥川龍之介という作家の特性として最も適當なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 書齋派の知識人でありながら、いかなる悲惨な話でも、現実の生活から割り出すことができた点。
ロ どんなにうれしい出来事や悲惨な事象に対しても、言葉を用意しうる才能の持ち主である点。
ハ 農民作家の子供殺しの創作に対して、そんなにも悲惨な現実があるのかねと反応できた点。
ニ 淪落して社会の底辺に生きる人々の悲哀にも共感しうる、類稀な感性の所有者であった点。
ホ ある時期から、独自にして誠実な、モラルや社会性を備えた生活を求めるようになっていた点。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

舞台で俳優がしゃべる言葉を「せりふ」と言うが、これを漢字で書く場合、「台詞」と「科白」の二通りがある。もちろん、内容も少し違う。「台詞」は言葉だけのものを言い、「科白」は、それに仕草が加わったものを言うのである。

そして、これをこのように使い分けるに当たっては、演劇の言葉に対する独特の感じ方がある、と考えていいだろう。たとえば、「煙草はせりふを割って吸え」という教訓がある。舞台で煙草を吸う場合の、演技者に与えられる教訓であるから、一般には知られていないかもしれないが、「台詞」と「科白」の違いを体得するには、良い手がかりになるものと思われる。

言っているのは、舞台で煙草を吸う場合、ひとつのせりふを言い終ってから吸うのではなく、そのせりふの途中で、せりふを割って吸え、ということである。当然煙草を吸う場合、それをポケットから出し、一本つまみ、口にくわえ、火をつけ、吸い、吐くという、細かい動作が必要とされるから、それらを全て、細かくせりふとせりふの間に、配分していかなければならない。

「それでね(と煙草を出し)言っちゃったんだよ、私は(と一本くわえ)あっちへ行っちゃってね(と火をつけ)そいつの目の前(と吸い込み)でさ……(と吐く)」というような具合である。「何だそれだけのことか」と思っただけのことか。実際にやってみるとわかるが、これくらいのこととは日常やっているにもかかわらず、意識的にやろうとすると、かなり難しい。せりふをスムーズに連続させようとすると動作が途切れ、動作をなめらかにつなげようとすると、せりふが停ってしまったりするからだ。何度か練習して出来るようになると達成感すら得られることになるだろう。

そして、効果のほどは明らかだ。こうして出来上ったせりふは、一度身体をくぐらせてきたもののように、甲に変質している。つまり「台詞」は「科白」に変ったのだ。同時に、その働きも変ったと言えよう。

「台詞」の場合聞き手は、発信された情報を受信するだけだが、「科白」の場合の聞き手は、その動作に自分自身の身体のリズムを同調させざるを得ないから、情報の受信と同時に、それへの共鳴にも思わず誘われることになる。つまり言葉は、発信し受信されるだけでなく、それに加えて共有し共鳴されなければならない、というのが「科白」の考え方なのである。

何故今ごろ、演劇においては古くからある、こうした教訓を持ち出さなければならぬかと言うと、ほかでもない、今日我々の周辺を飛び交う言葉が、次第に「科白」のニュアンスを失い、「台詞」でしかないものになりつつある気がするからである。

イ

情報化社会というのが、そもそもそういう時代なのであろう。言葉は、乙としてのみ流通し、「科白」としての質感を失っていったのである。現にここへきて多くの劇作家は、人々の言葉をしゃべる速度が早くなったことに気付いている。昔は、ギキョクを書く場合、四百字で一分だったのが、最近では六百字書かないと一分にならない。ロ

劇作家としてみれば、ちよつと損をしたような気分になったとしても、不思議ではない。これまで二時間の芝居を書く場合、原稿用紙百二十枚書けばよかったものを、百八十枚近く書かなくてはならなくなったのであるから。ただそれよりも、全体に言葉が軽くなり、出来事が上すべりしていくような感があることの方が、大きかったかもしれない。ハ

もちろんこのことは、舞台の上だけのことでなく、現実社会においても、問題となつてしるべきことであらう。日常我々の使っている言葉が、「台詞」にしか過ぎないとなると、会話から体験感が失われるから、(従って早口になる)思いがせじじユクすることなく、素通りしてしまう。ひとりよがりな思い込みで突っ走るストーリーカーなどは、このようにして生れるのではないかと考えられる。二

大人しいと思われていた人物が、突然凶暴になり、かつてだったら殴り合いで済んだものが、刃物による殺人事件になったりしているのも、会話による対人関係の調整機能が失われたからとしか思えない。「煙草はせりふを割って吸え」という、舞台上の演技者のための教訓は、今日、我々の日常生活に必要な智慧となりつつあるのかもしれない。ホ

古典落語によく、街中での人だかりの場面が出てくる。何かあると、実際にそうだったのだらう、ワツと人が集ってくるのである。当然後の方の人には、何のことかわからない。「中は何だい」「犬のお産らしいよ」「巾着切りがつかまつたのさ」「行き倒れだよ」と、情報はまちまちである。へ

今日ならさしづめ、テレビのレポーターがカメラを持って入りこみ、「どうやら仇討ちのようです」と、正しく情報を伝えてくれる。しかし、どうであらうか。たとえ情報としては間違っていない、古典落語の時代の方が、人々は確かなIを得たように思う。そして、今日必要なもの、それであると私は考える。ト

(別役実「台詞と科白」による)

問八 次の文は、本文中に入るべきものである。

イ

ト

から最も適当な箇所を一つ選び、その記号の記入欄にマ

ークせよ。

つまりそれだけ、言葉が消化されやすくなったのであり、逆に言えば味わいが薄くなったのである。

問九 空欄 甲 乙 に入る語句として、最も適当なものをそれぞれ次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- 甲
- イ リズムらしきもの
 - ロ 知的で明快なもの
 - ハ 癖を持たないもの
 - ニ 働き甲斐あるもの
 - ホ 手触りのあるもの
 - ヘ 繰返しの多いもの

- 乙
- イ 情感を適切に表わす「台詞」
 - ロ 情感を適切に表わす「科白」
 - ハ 意味の記号化された「台詞」
 - ニ 意味の記号化された「科白」
 - ホ 高度に情報化された「台詞」
 - ヘ 高度に情報化された「科白」

問十 傍線部 A「会話による対人関係の調整機能」を維持するうえで重要となる言葉の感覚を説明している、最も適当なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 言葉の意味の一つ一つをより厳密かつ詳細に検討し、文章を論理的に構成したうえで伝達のスキルを磨き、相手に伝える感覚が重要である。
- ロ 言葉を単なる記号として相手に発信するのではなく、質感のあるものとして相手と共有し、共鳴しようとする感覚を持つことが重要である。
- ハ 言葉の背景にある歴史と文化を十分に理解したのち、その豊かな多様性を文章で適切に表現したうえで他者に伝えていく感覚が重要である。
- ニ 言葉はあくまで「台詞」であることを知ったのち、対人関係の機微を十分に理解したうえで、洗練された会話を心掛けることが重要である。

問十一 空欄 I に入る語句として、最も適当なものを本文中から四字以内で抜き出して記述解答用紙の所定の欄に記せ。

問十二 本文の論旨に最も合致するものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 現代において演劇の言葉に対する独特の感じ方が大切なのは、情報化社会の進展にしたがい、身体性をともなう「科白」の陰影が喪失し、記号化された言語の交換が目立つようになったから。
- ロ 現代において演劇の言葉に対する独特の感じ方が大切なのは、人間関係が希薄となっている情報化社会において、孤独な他者との関係を円滑にするために必要不可欠な技術となっているから。
- ハ 現代において演劇の言葉に対する独特の感じ方が大切なのは、情報化社会にあって、「台詞」と「科白」という異なるせりふを巧みに使い分け、抑圧された自己を解放することができるから。
- ニ 現代において演劇の言葉に対する独特の感じ方が大切なのは、動作をともなう「科白」が記号として機能を果たし、情報化社会の中で「台詞」として流通、共有し共鳴されることになるから。

問十三 傍線部 1・2 のカタカナの部分の漢字に直せ（漢字は楷書で丁寧に書くこと）。

(三) 次の甲・乙・丙三つの文章を読んで、あとの問いに答えよ。

甲 「次の文章は、唐木順三『中世の文学』へ一九五五の一節である。」

数寄を和歌管絃において充しえなかつた長明は、かえつて数寄そのものに身をまかせるといふ行動に出た。別ないい方をすれば、我とわが妄執の激しさに辟易し、それをもてあつかいかねたといつてよい。そして数寄の障害になるものを次々と捨てていつてみたのである。おのが数寄を理解もせず、同情もしなかつた「世」がまず捨てられた。名利を求むる心が捨てられた。幸いにいまは妻もなければ子もない身にとつて不必要に大きい住居が捨てられた。『発心集』で「すき人」「すき者」といつてゐる大式資通も中納言頭基もみなそういう行動に出た人々である。長明は捨てられるものをすべて捨ててみた。最後に残つたのが方丈の庵と、そこに書いた財産目録が示しているものと、おのが I であった。数寄はここに極まり、方丈の住人は数寄の王者になつた。『方丈記』の後半は数寄讃歌といつてよい。その讃歌の極点において、彼が更にひとつの新しい問題に逢着したことは、『方丈記』の末尾が示しているとおりでである。『発心集』の序はそこから始まつてゐる。

『方丈記』に「ひとりしらべ、ひとり詠じて、みづから情をやしなふばかりなり」とか、「つねにはたらくは養性なるべし」といふ言葉がある。長明はいかなる心、いかなる生を養つたのであろうか。数寄心、数寄者のいのちという外はない。数寄に身を任せ、数寄の赴くところへ赴いてゐるわけである。ところで『発心集』の序はその数寄心、過剰で多情な心、他の一切を捨てて、数寄だけは捨てない心への批判から始まつてゐる。

「仏の教へ給へる事あり。心の師とは成るとも、心を師とする事なかれ」と。そこから序の筆は起こされてゐる。「実なるかな、此の言。人一期過ぐる間に、思ひと思ふわざ、悪業にあらずと云ふ事なし。もし形をやつし、衣を染めて、世の塵にけがされざる人すら、そともの鹿、つなぎがたく、家の犬、常になれたり。何に況や、因果の理を知らず、名利の謬りにしづめるをや。空しく五欲のきづなにかれて、終に奈落の底に入りなんとす。心有らん人、誰か此の事を恐れざらんや」。この解しにくいところを『往生要集』に頼つてみると次のようなことである。「常に心の師と為るべし、心をば師とせざれ」は『往生要集』第五「助念の方法」の四節「止惡修善」の末尾から來てゐる。総じて「助念の方法」の章は、心は虚空の如きものであつて、「二相にして、一無く別なき」ものであることを説き、己が心を有りと思ふのは迷ひであること、主観的な心で我を計り、他を計るはあやまりであることを説いてゐるといつてよい。我に念著する心、境界に執着する心は、ともに無いものを有りとする妄執から來てゐる。「我心をもつて自身に貪著すること」を遠離すべしと説かれ、A「尽日仏を念せんも、閑にその実を候すれば、淨心は是れ一阿にして、其餘は皆濁亂せり。野鹿は繋ぎ難く、家狗はおのづから馴る。何に況や、おのづから心を恣にせば、其の惡幾許ぞや」と説いてゐる。

II といふのである。心を師としてこれに己を任せるなど凡そ愚にして迷ひの極みといわなければならぬ。奔放な野鹿の如き心を繋いで、家の犬の如くに馴らし、心の師、調教師となれといふのである。長明の最も苦手とすることがここに説かれ、長明の生涯の生き方がここで全き迷ひとして否定されてゐるわけである。方丈の榮華、数寄の讃歌とこれほど距たつたものはない。長明は次の文を如何なる氣持で讀んだであらうか。B「大悲心を以て、屋宅となし、智慧を鼓となし、覺悟の杖を以て、これを打ち撃ちて、諸の煩惱に告げよ。汝等當に知るべし、諸の煩惱の賊は、妄想より生ずと云々」。方丈の屋宅に執し、琵琶を弾じ、心を養うと書いた長明とこの文を讀んだ長明の顔を思い出してみるがよい。『方丈記』の末尾の「今草庵を愛するも咎とす、閑寂に着するもさはりなるべし」といふ言葉が頭に浮びながら、「妄心の狂」になお愛着を禁じえなかつたのが長明であつた。

『発心集』序には前記の文につづけて、「我が心のはかなく愚かなる事を顧みて、彼の仏の教へのままに、心を許さずして、此の度、生死を離れて、とく淨土に生れん事、喻へば、牧士の荒れたる駒を隨へて遠き境に至るが如し」と書かれてゐる。心を養うといつた長明が、ここでは心を許さず、荒れたる心を率いる牧士とならうといふのである。しかし、そこまで来てまた長明は立ちどまる。「但、此の心に強弱あり、淺深あり。かつ自心をはかるに、善を背くにもあらず、惡を離るるにもあらず。風の前の草のなびきやすきが如し。又、浪の上の月の静まりがたきに似たり。何にしてか、かく愚かなる心を教へんとする」。自己執着即煩惱、自心即迷とは言わないのである。愚なる心といひながら、なおそれにかかわつてゐる風情である。所説妙なる仏説も、自分の内心を底から動かしえない。深遠な所説も、具体的な導きとはならない。そう長明は言つて、「短き心を顧みて、殊更に深き法を求めず、はかなく見る事、聞く事を註し集めつつ、しのびに座の右に置ける事あり」と書いた。『発心集』の説話の集成に対する彼の態度である。雲をとり、風をむすぶがように自由に氣ままに書きしるしたものであるから、「定めて謬りは多く、実は少なからん」といひ、「人信ぜよともあらねば、必ずしも、たしかなる跡を尋ねず。道のはとりのあだことの中に、我が一念の発心を樂しむばかりにや」と書いてその序を結んでゐる。愚なる心、短き心、たよりなき心といひながら、その心の師となる心をなおおのが心に求めている。さまざまな数寄心を否定しながら、最後に発心といふ自心の数寄心になお頼つてゐると言つてよい。心の師となる心をみずからのうちに求めているといつてよい。それは結局は「心を師」としていることである。

注 長明……鴨長明。一一五五―一二二六。

大式資通……源資通。一〇〇五―一〇六〇。

中納言頭基……源頭基。一〇〇〇―一〇四七。

財産目録……『方丈記』に記された、阿弥陀仏絵像・抄物・樂器など、わずかな所持物の一覧。

そとも……外面。

五欲……色・声・香・味・触の五感に対して起こる欲望。

乙「次の文章は、甲の文章に部分的に引用される鴨長明『発心集』序文の、全文である。」

仏の教へ給へる事あり。「心の師とは成るとも、心を師とする事なかれ」と。

実なるかな、此の言。人一期過ぐる間に、思ひと思ふわざ、悪業にあらずと云ふ事なし。もし形をやつし、衣を染めて、世の塵にけがされざる人すら、そともの鹿、つなぎがたく、家の犬、常になれたり。何に況や、因果の理を知らず、名利の謬りにしづめるをや。空しく五欲のきづな[□]に引かれて、終に奈落の底に入りなんとす。心有らん人、誰か此の事を恐れざらんや。かかれば、事にふれて、我が心のはかなく愚かなる事を顧みて、彼の仏の教へのまかに、心を許さずして、此の度、生死を離れて、とく浄土に生れん事、喩へば、牧士の荒れたる駒を随へて遠き境に至るが如し。

但、此の心に強弱あり、浅深あり。かつ自心をはかるに、善を背くにもあらず、悪を離るるにもあらず。風の前の草のなびきやすきが如し。又、浪の上の月の静まりがたきに似たり。何にしてか、かく愚かなる心を教へんとする。

仏は衆生の心のさまさまなるを鑑み給ひて、因縁・譬喩を以て⁴こしらへ教へ給ふ。我等、仏にあひ奉らましかば、何なる法に付いてか、勧め給はまし。他心智も得ざれば、ただ我が分³にのみ理を知り、愚かなるを教ふる方便は欠けたり。所説妙なれども、得る所は益すくなきかな。

此れにより、短き心を顧みて、殊更に深き法を求めず、はかなく見る事、聞く事を註し集めつつ、しのびに座の右に置ける事あり。即ち、賢きを見ては、及び難くとも、こひねがふ縁とし、愚かなるを見ては、自ら改むる媒^{なだち}とせむとなり。

今、此れを云ふに、天竺・震旦の伝へ聞くは、遠ければ書かず。仏・菩薩の因縁は、分にたへざれば是を残せり。ただ我が国の人の耳近きを先として、承る言の葉をのみ記す。

されば、定めて謬りは多く、実は少なからん。もしまた、ふたたび問ふに便りなきをば、所の名、人の名を記さず。云はば、雲を取り、風をむすべるが如し。誰人か是を用ゐん。しかあれど、人信ぜよともあらねば、必ずしも、たしかなる跡を尋ねず。道のほとりのあだことの中に、我が一念の発心を楽しむばかりにや、と云へり。

注 他心智……他人の考えていることを知ることのできる智慧。

震旦……中国。

丙「次の文章A・Bは、源信『往生要集』の一節で、甲の波線部A・Bのもとになった部分である。文中には、返り点・送り仮名を省いた箇所がある。」

A

問、念^{スレバ}仏^ヲ自^ラ滅^ス罪^ヲ、何^ゾ必^ズ堅^ク持^{タム}戒^ヲ。

答、若^シ一^ニ心^ニ念^{ゼバ}誠^ニ如^シ所^ノ責^{ムル}。然^{レドモ}尽^ム日^ニ念^{ゼンモ}仏^ヲ閑^ニ檢^{スレバ}其^ノ実^ヲ、淨^ハ心^ハ是^レ一^ニ兩^ニ、其^ノ余^ハ皆^ハ濁^リ。野^ノ鹿^ハ難^ク繫^ギ家^ノ狗^ハ自^ラ馴^ル。何^ニ況^ヤ自^ラ恣^{ニセバ}心^ヲ、其^ノ惡^ハ幾^ゾ許^ゾ乎。是^レ故^ニ要^ニ當^ニ精^ニ進^{シテ}持^{ツコト}淨^ヲ戒^ヲ、猶^ホ如^ク護^{ルガ}明^珠。後^ニ悔^{ユトモ}何^ゾ及^{バン}。善^ヲ思^フ念^{セヨ}之^ヲ。

B

如^シ六^ノ波^ノ羅^ノ蜜^ノ經^ニ云^{フガ}。結^{シテ}跏^ニ趺^ニ坐^{シテ}、正^ニ念^ニ觀^{シテ}察^シ、以^テ大^ノ悲^ノ心^ヲ而^{シテ}為^シ屋^ノ宅^ニ、智^ヲ慧^ヲ為^シ鼓^ト、以^テ覺^ニ悟^ヲ、杖^ヲ而^{シテ}扣^キ擊^キ之^ヲ、告^グ諸^ノ煩^ノ惱^ニ。汝^ハ等^ハ當^ニ知^ル、諸^ノ煩^ノ惱^ハ、賊^ハ從^リ妄^ニ想^ニ生^ス。我^ハ法^ヲ王^ノ家^ニ、有^{ルモ}善^ノ事^ヲ、起^{ルト}非^ズ汝^ハ所^ニ為^シ。汝^ハ宜^ニ速^ニ出^デ。若^シ不^ハ時^ニ出^デ、當^ニ斷^ツ汝^ノ命^ヲ。

注 淨戒……清淨な戒律。

六波羅蜜經……唐・般若三藏が翻訳した仏教經典。

結跏趺坐……両足を組み合わせてすわる靜坐法。

正念……正しい想念。

大悲心……大いなるあわれみの心。

法王……仏。

問十四 甲の文章における空欄 I に入る語として、最も適当なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 妄執 ロ 因縁 ハ 身心 ニ 智慧 ホ 煩惱 ヘ 観察

問十五 甲の文章における空欄 II に入る文章として、最も適当なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 方丈の屋宅への執着を捨て、大慈悲の心によって清らかになり、仏教に帰依しなければならぬ
ロ 一日中真摯に仏を念じて、世の中がひどく乱れているので、そこに意味を持たさねばならぬ
ハ ひまに任せて仏の实在を論じて、人の心は濁りきっているので、淨らかな心などは存在せぬ
ニ 心は即ち妄心、妄執であるから、これを放置すべきでなく、繋ぎとめて馴らさなければならぬ
ホ 清浄な心は莫大な価値のある貴いものであり、わずかでも濁り乱れた心を省みなければならぬ
ヘ 数寄心は、和歌や管絃では充たしえないので、ひたすら静かに座して仏を念じなければならぬ

問十六 甲の文章に、傍線部1「長明の顔を思い出してみるがよい」とあるが、筆者が憶測する長明の心情として、最も適当なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 方丈の住まいに執着し琵琶を弾じる自らの行動と、慈悲心をもって屋宅とし智慧をもって鼓となせという経文の内容が符合するのに驚いた。

ロ 大慈悲の心を家宅とし智慧を鼓とせよという経文に、方丈の庵を営み琵琶を弾じ心を養うという行為にお墨付きを得たと思った。

ハ「方丈記」末尾に自ら記した通り、あらゆる煩惱の賊徒は、妄想によって生ずると考えること自体、執着心につながると理解した。

ニ もろもろの煩惱を覚悟の杖で打つという経文に、自らの浄土への憧憬を重ね合わせて往生への自信を深め、我が意を得たと感じた。

ホ 妻も子も大きな住居も捨てた生活によって得た真実の数寄心と、経文に説く大慈悲心がびつたり合うことを認識して喜んだ。

ヘ あらゆる煩惱の種は妄想より生ずるという経文によって、自らの生き方が執着の心から離れてはいないことに気付かされた。

問十七 甲の文章における傍線部2「それは結局は「心を師」としていることである」の意味として、最も適当なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 鴨長明は『発心集』序文に、心の師となっても、心を師としてはいけないという仏の教えを記すことにより、自らを強く律し、方丈の屋宅にこもり数寄を極めることで、その教えの通りにみごとに生きぬいた。

ロ 鴨長明は数寄を追究して、生活上のさまざまな障害をそぎ落として方丈の庵に行き着いたが、それは結果として自らの発心そのものに愛着を生ずることになり、完全な悟りからはほど遠いものとなってしまった。

ハ 鴨長明は名利や財産を捨て、数寄の王者となることによって、方丈の庵において一念の発心を樂しむための自らの王国を築き、自らの内心に深く向き合う生活に没頭することになってしまった。

ニ 鴨長明は『発心集』序文に、愚かな心を顧みながら、ことさらに深い法は求めずに、見ることをそのまま記したと述べることにより、数寄を実現するために心を師とすることを正当化してしまった。

ホ 鴨長明は人の心を読むことのできる能力を身につけたことにより、かえって人の心の恐ろしさを知ることになり、日常生活において人を遠ざけることで、自らの心のみに頼らざるを得なくなってしまう。

ヘ 鴨長明は『往生要集』に引用される経文に出会った衝撃から、自らの愚かな考えを悔いあらため、発心という自らの数寄心を充たすことのできる方丈の屋宅を、人に知られないよう建設することにした。

問十八 乙の文章における傍線部3「こしらへ」の意味として最も適当なものを、次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ だまして ロ 扮装して ハ 工夫して ニ 用意して ホ だだめて ヘ 記録して

問十九 乙の文章における傍線部4「ただ我が分にのみ理を知り、愚かなるを教ふる方便は欠けたり。」の意味として、最も適当なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ ただ自分の取り分だけに正当な理由があると思うばかりで、頭の悪い者に配分しようという気持ちには欠ける。
ロ 他人の心を読める神通力を身につけることができたため、かえって愚かな者の心を付度する余裕がなくなった。
ハ 自分のあたりまえの行動に真理があると理解したため、それをばかげたことだと教え導く方法が足りなかった。
ニ 自己主張するばかりの人間は、時間の短縮を求めるばかりで、智慧が足りない者に目標を示すことができない。
ホ ただ自らの分際へのみふさわしい道理を悟るばかりで、考えの足りない者を教えるような手段は持っていない。
ヘ 衆生の心はさまざまなので、自分の利益をひたすら求める者もいれば、未熟な者を導く方法に欠ける者もいる。

問二十 乙の文章における傍線部5「に」と同じ品詞のものを、文中の二重傍線部イへの中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

問二十一 鴨長明が「方丈記」を執筆するにあたって範としたとされる作者と作品のうち、最も適当なものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 井原西鶴『世間胸算用』 ロ 世阿弥『風姿花伝』 ハ 兼好法師『徒然草』
ニ 慶滋保胤『池亭記』 ホ 清少納言『枕草子』 ヘ 太安万侶『古事記』

問二十二 丙の文章における傍線部6「宜速出」を次のように書き下した場合、空欄Ⅲ・Ⅳにはどのような語句が入るか、それぞれ記述解答用紙の所定の欄にひらがなで記せ。

Ⅲ すみやかに

Ⅳ

問二十三 甲・乙・丙の文章の、どの内容とも合致しないものを、次の中から二つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 自分の心はなかなか思うままにならないものだが、賢い人間を見て及び難いと思っても浄土を希求する縁としたり、愚かな人間を見ては自省する手がかりとしたい。

ロ 仏を正しく念ずれば、罪業を滅ぼすことができるので、必ずしも戒律を守る必要はなく、一日中念仏を称えていさえすれば、自ずから清らかな心が生じ、極楽浄土に往生することができる。

ハ 数寄心を追究するために、世間・名利・住居などあらゆるものを捨て、最後に残ったのが、本尊・書籍・楽器などわずかの身の回りの品々と、方丈の庵であった。

ニ 心の欲するままに生きていると、悪業がどれぐらい積もってしまうかわからないので、宝石を大切に護るように精進して、清らかな戒律をきちんとたたなければならぬ。

ホ 遠くインド・中国では、仏教に基づく広大な家を理想としていたが、鴨長明は方丈の屋宅に住まうことで、新たな日本の美意識を確立し、後世に大きな影響を与えた。

ヘ 仏典に説かれている内容は深く妙なる教えであるが、愚かで小さな自らの存在を顧みると、ことさらに深い悟りを求めることはせず、心のおもむくままに文章を記すこととする。

〔以下 余白〕